

HIV 及び結核のための多言語通訳の育成とその利用に関する検討

在留外国人に対する HIV 検査や医療提供の体制構築に資する研究班

研究分担者 沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組相港町診療所所長

研究分担者 宮首弘子 杏林大学総合政策学部教授

研究協力者 Tran Thi Hue 神戸女子大学文学部専任講師

研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授

研究要旨

近年日本で報告される HIV・エイズ報告数の中で外国人の占める割合は増加傾向が続いている。一方で、日本で外国人が検査や医療を受ける環境は整っているとは言い難い。日本で働く外国人の国籍の多様化の進む中で、日本で報告される HIV 陽性外国人の国籍も多様化している。多言語の通訳体制の整備が外国人の HIV の検査・診療体制の整備には欠かすことができない。

2022年8月と2023年の1月からエイズ診療拠点病院への医療通訳派遣で実績のある二つのNPOに委託し医療通訳研修を行った。66人の参加者が得られ、このうち同意の得られた62人に対してそのプロフィールと研修効果についての解析を行った。知識についての得点は大きく上昇し、研修の効果が認められた。

本年はこうして育成した通訳者を研究班が自治体や大学などと連携して実施した外国人向けの検査会や、既存の保健所の無料匿名検査などに遠隔通訳として提供する事業を実施した。遠隔通訳の提供は2022年10月より研究班が協力して実施された土曜休日のHIV検査会で開始され、11月末には全国の保健所へ案内された。これにより本年度は半年間に16件の通訳利用があり、言語の内訳は英語7件、中国語5件、ベトナム語3件、ネパール語1件であった。保健所での通訳はまだ2件であったが、円滑な検査の実施と説明に貢献した。一方研究班の検査会では、相談の際の通訳利用が多く、PrEPなど複雑な相談も多く、通訳の研修の重要性が再認識された。

A. 研究目的

外国人の HIV・エイズ報告数は2013年よりゆるやかな増加傾向が続いている。特に近年は日本人の報告数が減少する中で HIV・エイズいずれも外国人の占める割合の増加が目立つ¹⁾。近年外国籍男性についても推定感染地が国内とされるものが多く、日本に滞在する外国人への検査相談体制の整備は重要性を増して

いる。従来 HIV 陽性が判明した外国人の中で、タイ、ブラジルなどの特定の国の出身者の占める割合が高かったが²⁾³⁾、近年、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナムなどのアジア・太平洋地域の多様な国の出身者の増加が目立っている⁴⁾。

先行研究では、日本語と英語ともに不自由な外国人の医療アクセスが遅れていることが指摘されている⁵⁾。HIV の検査・診療を外国人に

対応できるように整備するためには、今後フィリピン語、インドネシア語、ベトナム語などの言語も含めた通訳体制の構築が重要である。

当研究班は、2016年度からH I V・結核に対応する医療通訳のための研修カリキュラムと教材を作成し、関東及び周辺地域で活動するN P Oや国際交流協会の担当者を対象に、研修を実施した。2019年度からは対象地を関西まで広げて研修を行った。2020年度からはZoomを活用したオンライン研修を開始し、2021年度は全国の医療通訳人材に対して広報して実施した。

今年度は、育成した人材を活用し外国人を対象とした検査の実施や保健所などの無料匿名検査への遠隔通訳の提供によって外国人の検査機会の拡大を行いその実現性の評価を行っている。

B. 研究方法

2022年8月～10月と2023年1月～2月に、感染症（H I V・結核）への派遣を任務とする医療通訳の研修を実施した。研修は、エイズ診療拠点病院に対する医療通訳派遣の実績が最も多いN P OであるCHARMとMICかながわに委託して行った。

研修内容は第1部を結核・H I Vに関する基礎知識やセクシャリティに関する知識などの座学での研修とし、第2部を通訳技術の習得を主な目的としたロールプレイによる実技の指導を中心とした。

研修の効果を図る目的で、結核・HIVの知識の学習を目指した第1回の研修参加者に対して、知識および結核やHIVについての認識がどの程度定着したかについての評価を行った。

研修に参加した66人に対して、無記名の自記式質問票への記入を研修の前後で求めた。参加者は、研修の特前と直後にGoogle form上に設定された質問に対してオンラインで回答を寄せた。このうち調査への協力の同意が得られた62人について解析を行った。質問の内容は、参加者のプロフィール、H I Vへの知識、

結核の知識、H I Vや結核への認識や態度についてであり、研修の前後でそれぞれの正答率・望ましい認識や態度の割合を比較した。

さらに本年は、自治体・大学・医療機関と連携し外国人向けの検査会を都内・沖縄で計10回実施した。これらの検査会や保健所の検査事業に対して遠隔通訳の提供を行いその実効性の評価を行った。

（倫理面への配慮）

調査の参加は任意であることを質問票に記載し、参加を希望しない場合はその旨記載する欄を設けることで調査参加の同意を得た。

遠隔通訳の実施に当たっては通訳者は個室を確保し、毎回異なるIDとパスワードを設定したビデオ会話システムを利用し受検者のプライバシーの漏洩がないように対策を行った。

C. 研究結果

1) 研修参加者のプロフィール

2022年8月と2023年1月に行ったオンライン講義の参加者のうち、解析に同意の得られた62人の回答より研修参加者のプロフィールを以下に示す。

表1. 研修参加者の担当言語毎の人数

| 担当言語 | 人数 | 担当言語 | 人数 |
|-------|----|-------|----|
| 中国語 | 16 | スペイン語 | 5 |
| 英語 | 22 | 韓国語 | 4 |
| ベトナム語 | 4 | その他 | 11 |

研修参加者は、女性が53人と全体の85.5%を占め、主な生育地が日本の人が46人と全体の64.4%を占めた。年齢は40歳台から50歳代を中心に幅広く分布していた。最終学歴は大卒（38人）と大学院卒（13人）で合わせて約82.3%を占めた。

表 2. 通訳研修参加者のプロフィール

| | | 人数 | % |
|-----|-------|----|------|
| 性別 | 女 | 53 | 85.5 |
| | 男 | 9 | 14.5 |
| 生育地 | 主に日本 | 46 | 74.2 |
| | 主に外国 | 16 | 25.8 |
| 年齢 | 20-29 | 1 | 1.5 |
| | 30-39 | 9 | 14.6 |
| | 40-49 | 12 | 19.4 |
| | 50-59 | 27 | 43.5 |
| | 60歳以上 | 13 | 21.0 |
| 学歴 | 高卒 | 4 | 6.5 |
| | 大卒 | 38 | 61.3 |
| | 大学院卒 | 13 | 21.0 |
| | その他 | 7 | 11.3 |

過去の医療通訳経験は、「経験なし」が 25 人 (40.3%) であり、「経験 5 年未満」が 22 人 (35.5%) を併せると 8 割近くを占めた。一方で 10 年以上の経験がある通訳者が 4 人 (6.5%)、結核患者の通訳経験がある受講者が 10 人 (16.1%)、HIV 感染者のための通訳経験がある参加者が 11 人 (17.7%) と経験豊富な参加者も一定含まれていた。

表 3. 参加者の医療通訳経験

| | | 人数 | % |
|----------|----------|----|------|
| 活動期間 | なし | 25 | 40.3 |
| | 5 年未満 | 22 | 35.5 |
| | 5~10 年未満 | 11 | 17.7 |
| | 10 年以上 | 4 | 6.5 |
| 結核通訳経験 | あり | 10 | 16.1 |
| | 無し | 52 | 83.9 |
| HIV 通訳経験 | あり | 11 | 17.7 |
| | 無し | 51 | 82.3 |

2). 結核と HIV に対する知識と研修の効果

結核と HIV の通訳を行う上で必要となる知識について講義で解説を行い、これらの知識がどの程度習得されているかを評価するために、研修の前後での正答率の比較を行った。

表 4.1 「結核・HIV の知識」の評価結果

| | 研修前 (N=59) | | 研修後 (N=62) | |
|--------------|---------------|------|---------------|------|
| | 正答数 (率) | | 正答数 (率) | |
| 結核 | | | | |
| 標準治療の薬剤数 | 12 | 20.3 | 41 | 66.1 |
| 感染性のある結核 | 45 | 76.3 | 55 | 88.7 |
| 特徴的な病状 | 41 | 69.5 | 52 | 83.9 |
| 主な副作用の知識 | 39 | 66.1 | 51 | 82.3 |
| 診断に有用な検査 | 17 | 28.8 | 53 | 85.5 |
| HIV | | | | |
| HIV の感染経路 | 49 | 83.1 | 58 | 93.5 |
| AIDS と CD4 値 | 38 | 64.9 | 59 | 95.2 |
| 主な日和見感染症 | 20 | 33.9 | 48 | 77.4 |
| HIV と検査 | 9 | 15.3 | 28 | 68.3 |
| HIV の治療予後 | 34 | 52.6 | 54 | 87.1 |

研修後の正答率の上昇は全ての設問に認められ、研修後はほとんどの設問で正答率が 8 割以上となった。

3) 結核・HIV への認識・行動意志に関する設問

結核や HIV に対する認識や行動意思に関わる質問として恐怖感がないか、結核患者・エイズ患者への支持的態度を持っているかなどに関する質問を行った。

いずれの質問に対しても研修後に望ましい回答の割合が増加した。しかし、望ましい回答の割合は、研修前の 40.1% から 50.5% と遠隔で研修を行った 2021 年度と同様であり、対面で

研修を行っていた 2019 年度より改善率が低い傾向がみられた。

表 5 結核・HIV への認識・行動意志

| | 前 人数(%) | 後 人数(%) |
|-------------------|------------|------------|
| 結核とても怖い以外 | 44(74.6) | 49(79.0) |
| AIDS を友人とよく話せる | 7(11.9) | 17(27.4) |
| 咳や痰が続いたらきつと受診を勧める | 36(61.0) | 47(75.8) |
| 同僚がエイズで服薬でも全く不安ない | 11(18.6) | 20(32.3) |
| 結核の友人の通訳をきつと引き受ける | 18(30.5) | 24(38.7) |
| エイズを通訳依頼引き受ける | 25(44.1) | 31(50.0) |

4) 遠隔通訳利用状況

2022 年 12 月に遠隔通訳の実施を広報してから保健所より 7 件の問い合わせがあり、このうち 4 件で通訳実施を準備。うち 2 件は当日受検者が現れない等の理由で中止となったが 2 件で実施し高い評価を得た。また、研究班の実施する検査会（東京・沖縄）にて 14 件の遠隔通訳を実施した。遠隔通訳を実施した言語は、英語が最も多く次いで中国語・ベトナム語の順であった。

遠隔通訳実施状況

| | | 人数 |
|------|-------|----|
| 検査会場 | 保健所 | 2 |
| | 研究班検査 | 14 |
| 地域 | 東京 | 13 |
| | 関東 | 1 |
| | 中国 | 1 |
| | 九州 | 1 |
| 言語 | 英語 | 7 |
| | 中国 | 5 |
| | ベトナム語 | 3 |

D. 考察

新型コロナウイルス感染症の第 7 波と第 8 波の影響を受け、本年度の研修も Zoom を利用したオンラインでの研修となった。この結果、全国からの参加者が得られるという利点もあったが、認識や行動意思に関する設問では、対面研修に比べて改善効果が低い傾向が今回も再現された。

研修効果の判断は単に知識や行動意思の変化だけによって行われるのではなく、実際に通訳が稼働することになるかどうか併せて評価する必要がある。当研究班で実施した 10 回の検査会に遠隔通訳の利用を行ったほか、保健所に呼びかけ遠隔通訳の提供を行った。保健所への通知が、11 月の末と遅かったことに加えて第 8 波の流行と時期を一にした関係から依頼件数が伸びなかったが、流行の鈍化した 2 月より問い合わせが相次ぎ、派遣を行った 2 件では高い評価を得た。

研究班が実施した 10 回の検査事業では、軽 14 回の遠隔通訳の利用が行われた。検査の円滑な進行や検査後の説明の理解に役立った。一方で、本年の検査事業の中で外国人受検者から PrEP に関する相談や質問が急増しており、通訳者に対する研修で PrEP についての解説が限定的なものであったことから通訳の円滑さに支障が生じたこともあった。外国人受検者は、日本にいても出身国側より HIV に関する情報を得ていることも多く、出身国側の急速な PrEP の普及を反映し日本人受検者よりも先行して PrEP の関心が高まっていると思われる。今後の通訳体制の整備にあたっては、こうした海外情勢にも十分配慮をして研修などの準備を整える必要がある今後の課題である。

E. 結論

外国人のHIV・結核に対応する医療通訳の育成のためにオンライン研修を実施した。広範な地域から多数の参加者があった。研修を通じて育成された通訳者が遠隔通訳として検査事業の通訳を行った。まだ少数であるが検査を補助する有用性が示された。

参考文献

- 1) 厚生労働省エイズ動向委員会・令和4年エイズ動向委員会年報, 2022
- 2) 沢田貴志, 奥村順子, 若井晋. 2001HIV 感染症対策ストラテジー 外国人医療の問題点. 総合臨床 50:2781-2784. 2001
- 3) 沢田貴志, 奥村順子, 若井晋. 在日外国人HIV 診療についての研究. 厚生労働科研費 HIV 感染症の医療体制に関する研究班総合研究報告書. 183-186, 2003
- 4) 沢田貴志, 山本裕子, 樽井正義, 仲尾唯治: エイズ診療拠点病院全国調査から見た外国人の受療動向と診療体制に関する検討. 日本エイズ学会誌 18:230-239, 2016
- 5) 沢田貴志, 山本裕子, 塚田訓久, 横幕能行, 岩

室紳也, 樽井正義, 仲尾唯治. 日本における HIV 陽性外国人の受療を阻害する要因に関する研究. 日本エイズ学会誌 22:172-181, 2020

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

(口演)

- 1) 沢田貴志. 在留外国人に対する医療アクセス支援の課題. シンポジウム「新型コロナウイルス感染症時代における外国籍住民の保健医療課題」日本看護科学会総会. 名古屋 2021 年 12 月 5 日
- 2) 沢田貴志. コロナ禍で見えてきた在日外国人の医療アクセスの課題. シンポジウム「ステイグマとの闘いについて」第 1 回 First-Track Cities Workshop Japan 2021. 東京
- 3) 沢田貴志. 在日外国人のエイズ対策と政策提言. パネルディスカッション「HIV 対策の歴史から学ぶ」政策立案過程への市民・当事者参画. Fast Track Cities Workshop Japan 2022. 東京

H. 知的財産権の出願・登録情報

なし